

〈研究ノート〉

## 宮澤賢治童話の“生死”考（2）

### ——『三宝絵』の「鹿王」と重ねながら

千葉 貢

前号にて

一、はじめに —— 「可憐」命のままに

二、『三寶絵』のなかの「鹿王」

三、『なめとこ山の熊』の諦観 —— 人と熊の交感 ——

と題して掲載した。今回は左記の通りである。

四、『フランドン農学校の豚』の苦惱

—— 予告された“死”と向かい合いながら

人の歴史は「衣食住」の確保と共に展開されて来た。近年では「食の安全や安心を希求する声が高まり、対応や対策を講ずるようになって久しい。食料自給率<sup>（注1）</sup>が低下して来たから「国内産を増やし、国内産を食べよう」とか、「外国産（輸入）に依存するのは危ない」などという声も聞こえて来る。それでも食料品店やスーパーなどの店頭には、各国からの多種多様な輸入食品が、所狭しと並べられており、選択を楽しんでいる。消費者は値段だけではなく、国内産か、外国産

か<sup>（注2）</sup>に拘るようになった。だからか、具体的な生産地（国別、場所）はもとより、生産者や製造（加工）者に加え、製造（加工）した年月日、製造（加工）場所に加え、賞味期限までが明示（明記）されるようになった。馴染みの個人商店やスーパーマーケット、農協の即売所<sup>（注3）</sup>たまに出かける「市場」や「道の駅」などの陳列棚に並べられた農産物に、値段や生産地は勿論のこと、生産者の氏名や顔写真までが添えられ、値段に含まれた鮮度や品質、安全に関する自信と責任を表明し、消費者の来店や来場を待ち、選択のうえに購入してもらうことを願っている。

“食”に資する植物は栽培する。その品質や安全は、自然環境である日照（陽光）や風雨、土壌などの条件に加え、施肥や追肥の有無種類、加減などによって左右され、収穫がもたらされる。毎年、同じ時期に同じ場所で、同じ野菜を植えつけ、同じように施肥や追肥を施し、同じ農作業を繰り返し同じ期間を費やしながらも、その出来や品質の具合、収穫量などに違いが生じやすい。だから豊作を期待したく

ても、その年の天候によって人知に及ばない“想定外”“まさか”の発生を恐れ、平年作や平年並み、例年通りを祈念する。だから“年々歳々花相似たり”という保守的にして必然の結果を歓迎し、それまでにない自然の異変や、人知に及ばない異常な気象現象を怖れる。これは永年にわたって体得して来た農民の経験知であり、職業人としての経験則である。それが“食”の確保に努めて来た人々の精神であり特徴なのである。こうした人々を“農民”と名づけられたり、“百姓”と呼んだりして長い歴史を刻んで来た。ましてや“身分”や“階級”のなかに位置づけられたのは、時の権力や政治という作為によって押しつけられて来ただけである。人は自ら生まれる場所を選び、農民として生まれて来ることはない。今日に至って身分や階級を表す名称ではないのだから、歴史上、“衣食住”のなかの“食”に関して、最も長きにわたり携わって来た職業人こそが農民であり、その職業の“何でも熟す”特徴からして“百姓”と呼ばれて来たのであろう。そこで、私は「年々歳々花相似たり」の如くに、例年通りの必然を祈念し希求する習性を「百姓精神」と呼び、貫いて来た言動を「百姓思想」の具現である、と強調して来た。

私は、その特異な「百姓思想」を裏つける事例として、“自然主義文学の代表的な作品である”と評価の高い、長塚節の長編小説『土』(明治四十三年「東京朝日新聞」に連載)を採り上げ、そのなかの登場人物“勘次一家”の人々について論究したことがある。そこで教えられたことは人間も植物も環境によって成(生)長するということである。

人間も植物も、自らが自らの性質をつくり、人間となり植物となる。なるほど人間だけではなく植物も、“性”相近し、習“相遠し”ということなのである(孔子『論語』陽貨篇)。それでいて農産物のなかの“植物”は、人間の手によって栽培され商品化される。農業は人為的な生業の別称であり、職種の一つなのである。農産物は売買されるから安全や安心で、栄養価の優れた品質を求めて栽培され値段がつけられる。つまり、農産物のなかの“植物”を栽培するように、賢治童話「フランドン農学校の豚」も商品化のために栽培、いや“飼育”されるといふ、動物の“豚”にとつて「つらい話」なのである。

農産物のなかの植物は、植えつけられた場所でも言わずに栽培されるが、動物の豚は本意なので不満を訴え、不安を抱えながらも“飼育”される。飼育の意味や方法を知るためにも、人間のしたたかな取り組みについて、作品を通じて紹介してみよう。

豚を飼育する「フランドン農学校」の、「化学を習った一年生の生徒が、自分の前に来ていかにも不思議そうにして、豚のからだを眺めて居た。」という、「その生徒が云った。」ことは、次の通りである。(注4)

ずいぶん豚というものは、奇体なことになっている。水やスリッパや藁をたべて、それをいちばん上等な、脂肪や肉にこしらえる。豚のからだはまあたえれば生きた一つの触媒だ。白金と同じことなのだ。無機体では白金だし有機体では豚なのだ。考えれば考える位、これは変になることだ。

このように「化学を習った一年生」は、「豚のからだ」を「いちばん上等な、脂肪や肉にこしらえる」化合物に見えたり、「白銀触媒」のことを想起してか、「白金と同じことなのだ」と喩えたり、「有機体では豚なのだ」などと博学ぶりを誇示するかのようには、化学的な説明を展開している。思わず「なるほど」と、教えられたような気になったのだが、これは「豚」に限らないであろう。人間もまた、等しく「奇体なことになって」おり、多種多様なものを食べ、化合や触媒とは言わないけれども「消化吸収」を促し、栄養を摂取する。人間の体を「白金」に喩えたら批難され断罪されるであろうか。人間は高等動物だという。掛け替えない「命の尊厳」を訴え同調を求める。確かに複雑な構造や生態を秘めており、なかなか正体を現さないし「握めない」。心情や個性という「奇体」なことに翻弄されるとともに、保身のために小賢しく利害打算を施し、威信に託けた言葉を、それみよがしに多用する。その一例が「防災担当大臣」や「災害復興担当大臣」であり、あれこれ並べた「海洋政策・領土問題、国土強靱化担当大臣」「国家公務員制度、消費者・食品安全、規制改革、少子高齢化、男女共同参画社会担当大臣」などに加え、「原子力損害賠償紛争解決センター」なる名称であろう。新たに「地方創生大臣」が創設され、「安全保障法制」に関する任務も加えられるという。こうした命名や言葉遣いこそが、丁寧なおもてなしの見せかけであり、親切にもてなすどころか、楽しい予告や明るい予報に期待を抱かせるように、多くの情報に振り

回されがちな心情につけ込んだ御為こかしである。しかも真実や責任を装った最もらしい言葉（漢語という音読みの漢字で、二字熟語を並べた名称が多い）をもてはやし、人間の感受性や判断力、思考力などの低下を蔓延させ、社会の低俗化をもたらすばかりである。それは各種選挙の低い投票率を見るまでもなく、民主制や民主主義とは名ばかりの衆愚政治の拡大に寄与するばかりであり、真摯な言葉遣いをもてあまし、自由を謳う言葉のもてあそびも加え助長しているのではなからうか。

こうして豚の嘆きは、時を経て他人事ではないのである。——新たに「地方創生大臣」「安全保障法制」に関する任務を加えられる人間と同じように、「フランドン農学校の畜産学の先生は、毎日来ては鋭い眼で、じつとその生体量を、計算して帰って行った。」とあり、続いて、

「も少しきちんと窓をしめて、室中暗くしなくては、脂がうま  
くかからんじやないか。それにもうそろそろ肥育をやってもよから  
うな、毎日阿麻仁を少しずつやって置いて呉れないか。」教師は若  
い水色の、上着の助手に斯う云った。

と語られている。いよいよその時が近づいて来た、ということである。「ところが、丁度その豚の、殺される前の月になって、一つの布告がその国の、王から発令されていた。」とのことで、何事だろうかと、

豚でなくとも興味をそられたので続けたい。

それは家畜撲殺同意調印法といい、誰でも、家畜を殺そうというものは、その家畜から死亡承諾書を受け取ること、又その承諾書には家畜の調印を要すると、こう云う布告だったのだ。

さあ、そこでその頃は、牛でも馬でも、もうみんな、殺される前日には、主人から無理に強いられて、証文にペタリと印を押したもんだ。ごく年よりの馬などは、わざわざ蹄鉄をはずされて、ぼろぼろなみだをこぼしながら、その大きな印をばたと証書に押し出したのだ。

という、何とも不思議な「家畜撲殺同意調印法」なる法令である。これは「注文の多い料理店」ではないけれども、人間が勝手に解釈したり、人間にとって都合のよい内容にしたり、猶予なしで強制執行の可能な法令に違いない。家畜と言えどもどうして「撲殺」されるのに「同意」し、あるいは「死亡承諾書」に「調印」するだろうか。人間の「死刑」とは異なり、何の罪も犯していないのだから、賢治は「その教師の語気について、豚が直覚したのである。」として、人間の小賢しさや術言(げんごん)ぶりをもちえずにつけ加えている。人間自ら創設、造語した「家畜撲殺同意調印法」の執行が、いかに「流暢な人間語」を話し、明確な意識を持つ「豚」(家畜)にとって過酷な仕打ちかを承知し、配慮することをも忘れない。けれども、それも家

畜(豚)にとっては人間の陰險な奸策であり、御為こかしの甘言に他ならない。どこまでも人間の下心を隠蔽する、巧みな二枚舌ぶりを描いている。

そこで、私は「同意調印法」から当世の話題になっている、「脳死」を人の死と認めるかどうか、について思いだしたのだが、生前から「脳死」状態になったらという条件つきで、「臓器」提供の「承諾書」を求めたり、「死亡承諾書」の記入を依頼したりすることの可能な、「脳死、同意調印法」が出来るのではないかという不安を覚える。無意識の状態だからという判断で「撲殺」され兼ねない強権や強制の怖れもあろうから、と。

或る日のこと、フランドン農学校の校長が、大きな黄色の紙を持ち、豚のところへやって来た。豚は語学も余程進んでいたのだし、又實際豚の舌は柔らかで素質も充分あったので、ごく流暢な人間語で、しずかに校長に挨拶した。

「校長さん、いいお天気でございます。」

校長はその黄色な証書をだまって小わきにはさんだまま、ポケットに手を入れて、にがわらいして斯う云った。

「うんまあ、天気はいいね。」

豚は何だか、この語が、耳に入って、それから咽喉につかえたのだ。おまけに校長がじろじろと豚のからだを見ることは全くあの畜産の、教師とおんなじことなのだ。

豚はかなしく耳を伏せた。そしてこわごわ斯う云った。

「私はどうも、このごろは、気がふさいで仕方ありません。」

校長は又にがわらいを、しながら豚に斯う云った。

「ふん。気がふさぐ。そうかい。もう世の中がいやになつたかい。

そういうわけでもないのかい。」豚があんまり陰気な顔をしたものだから、校長は急いで取り消しました。

それから農学校長と、豚とはしばらくしんとしてにらみ合ったまま立っていた。ただ一言も云わないでじいつと立って居つただ。そのうちにどうとう校長は、今日は証書は諦めて、

「とにかくよく休んでおいで。あんまり動きまわらんでね。」例の黄いろな大きな証書を、小わきにかこいこんだまま、向こうの方へ行つてしまふ。

豚はそのあとで、何べんも、校長の今の苦笑や、いかにも底意のある語を、繰り返し繰り返し見て、身ぶるいしながらひとりごとした。

『とにかくよく休んでおいで。あんまり動きまわらんでね。』とは、一体これはどう云う事か。ああつらいつらい。豚は斯う考えて、まるであの梯形の、頭も割れるように思った。

とあり、賢治は「つらい豚」の気持ちを代弁しているものの、豚なるがゆえの運命を受け入れている。そこで、「次の日のこと、畜産学の教師が又やって来て例の、水色の上着を着た、顔の赤い助手といつ

ものするどい眼付きして、じつと豚の頭から、耳から背中から尻尾まで、まるでまるで食い込むように眺めてから、尖つた指を一本立てて、『毎日阿麻仁をやつてあるかね。』やつてあります』『そうだろう。もう明日だって明後日だって、いいんだから。早く承諾書をどれあいんだ。どうしたんだろう。昨日校長は、たしかに証書をわきに挟んでこつちの方へ来たんだが。』などという会話を聞いた豚は、

そのあとの豚の煩悶さ、(承諾書というのは、何の承諾書だろう、何を一体しろと云うのだ、やる前の日には、なんにも飼料をやっちゃいけない、やる前の日って何だろう。一体何をされるんだろう。どこか遠くへ売られるのか。ああこれはつらいつらい。)豚の頭の割れそうなことは、この日も同じだ。その晩、豚はあんまりに神経が興奮し過ぎてよく睡ることができなかった。

などと、嘆き悲しむ様子が描かれている。それでも「ところが次の朝になって、やっと太陽が昇った頃、寄宿舎の生徒が三人、げたげた笑つて小屋へ来た。」とあり、そして「又もや厭な会話を聞かせたのだ。」という「会話」を続けている。

「いつだろうなあ、早く見たいなあ。」

「僕は見たくないよ。」

「早いといいなあ、困つて置いた葱だって、あんまり永いと凍つ

ちまっつ。」

「馬鈴薯ほれいしょもしまつてあるだろう。」

「しまつてあるよ。三斗としまつてある。とても僕たちだけで食べられるもんか。」

「今朝はすいぶん冷たいねえ。」一人が白い息を手に吹きかけながら斯うと云いました。

「豚のやつは暖かそうだ。」一人が斯う答えたら、三人共どつとふき出しました。

「豚のやつは脂肪でできた、厚さ一寸の外套がえとを着ているんだもの、暖かいさ。」

「暖かそうだよ。どうだ。湯気さえほやほやと立っているよ。」  
豚はあんまり悲しくて、辛つらくてよろよろしてしまふ。

とあり、やがて「三人はつぶやきながら小屋を出た。そのあとの豚の苦しさ、（見たい、見たくない、早いといい、葱が凍る、馬鈴薯三斗、食いきれない。厚さ一寸の脂肪の外套、お恐い、ひとの体をまるで観透みとおしてるお恐い。恐い。けれども一体おれと葱と、何の関係があるだろう。ああつらいなあ。）その煩悶の最中に校長が又やって来た。」というように、賢治は「つらい、つらい」と「煩悶」する豚の気持ちを、重ねて説いている。そして、校長は「入り口でばたばた雪を落として、例のあいまいな苦笑をしながら前に立つ。」とあり、豚の「死亡承諾書」を取得すべく下心を秘め、豚の心境を損ねないように配慮

しながら、穏やかに語りかけるのだった。

「どうだい。今日は気分はいいかい。」

「はい、ありがとうございます。」

「いいのかい。大へん結構だ。たべものは美味あじしいかい。」

「ありがとうございます。大へん結構でございます。」

「そうかい。それはいいね、ところで実は今日はお前と、内内相談に来たのだがね、どうだ頭ははつきりかい。」

「はあ。」豚は声がかすれてしまふ。

「実はね、この世界に生きてるものは、みんな死ななけあいかんのだ。実際もうどんなもんでも死ぬんだよ。人間の中の貴族でも、金持でも、又私のような、中産階級でも、それからごくつまらない乞食こしきでもね。」

「はあ、」豚は声が咽喉のどにつまんで、はつきり返事ができなかつた。

「また人間でない動物でもね、たとへば馬でも、牛でも、鶏でも、なまずでも、バクテリアでも、みんな死ななけあいかんのだ。蜚蠊ひせうろうのごときはあしたに生まれ、夕べに死する、ただ一日の命なのだ。みんな死ななけあならないのだ。だからお前も私もいつか、きつと死ぬのにきまつてる。」

「はあ。」豚は声がかすれて、返事もなにもできなかつた。

「そこで実は相談だがね、私たちの学校では、お前を今日まで養つて来た。大したこともなかつたが、学校としては出来るだけ、ずい

ぶん大事にしたはずだ。お前たちの仲間もあちこちに、ずいぶんあるし又私も、まあよく知っているのだが、でそう云っちゃ可笑しいが、まあ私の処ぐらい、待遇のよい処はない。」

「はあ。」豚は返事しようと思つたが、その前にたべものが、みんな咽喉へつかえてどうしても声が出て来なかつた。

「でね、実は相談だがね、お前がもしも少しでも、そんなようなことが、ありがたいと云う気がしたら、ほんの小さな頼みだが承知をしては貰えまいか。」

「はあ。」豚は声がかすれて、返事がどうしてもできなかつた。

「それはほんの小さなことだ。ここに斯う云う紙がある、この紙に斯う書いてある。死亡承諾書、私儀永々御恩顧の次第に有之儀儘、御都合により、何時にても死亡仕るべく候年月日フランドン畜舎内、ヨークシャイヤ、フランドン農学校長殿 とこれだけのことだがね。」校長はもう云い出したので、「瀧千里にましくしかけた。」

「つまりお前はどうせ死ななければいかなから、その死ぬときはもう潔く、いつでも死にますと斯う云うことで、一向何でもないことさ。死ななくてもいいうちは、一向死ぬことも要らないよ。この処へただちよとお前の前肢の爪印を、一つ押しておいて貰いたい。それだけのことだ。」

豚は眉を寄せて、つきつけられた証書を、じっとしばらく眺めていた。校長の云う通りなら何でもないが、つくづくと証書の文句を讀んで見ると、まったく大へんに恐かつた。とうとう豚はこらえ

ねてまるで泣き声でこう云つた。

「何時にてもということは、今日でもということですか。」

校長はぎくつとしたが、気をとりなおしてこう云つた。

「まあそうだ。けれども今日だなんて、そんなことは決してないよ。」

「でも明日でもというんでしよう。」

「さあ、明日なんていうような、そんな急でもないだろう。いつでも、いつかというような、ごくあいまいなことなんだ。」

「死」ということは、私が一人で死ぬのですか。」豚は又金切声で斯う聞いた。

「うん、すっかりそうでもないな。」

「いやです、いやです、そんならいやです。どうしてもいやです。」

豚は泣いて叫んだ。

「いやかい。それでは仕方がない。お前もあんまり恩知らずだ。」

犬猫にさえ劣つたやつだ。」

校長はぶんぶん怒り、顔をまっ赤にしてしまい証書をポケットに手早くしまい、大股に小屋を出て行つた。

ということであり、再び読みながら考えた。例えば『いつか』死ぬと知ることと『何時にても』死ぬという『承諾』との間、『みんな死ぬ』という一般性と『私が一人で死ぬ』という覚悟の間、そこには越え難い断絶がある。支え手を抜きにした無責任な言葉と、主体として背

負わされる実存との落差だとも言える。」<sup>(注6)</sup>であろう。そして、校長の言動こそが「法」を笠に著して強制執行し兼ねない、権力者の詭弁であり象徴だということである。それはまた、「環境(地球)にやさしい○○」「安全で安心な△△」「持続可能な□□」などと、臆面もなく大言壮語を繰り返す商人(あきないひと)がいたり、「熱中症防止情報」「紫外線情報」「花粉情報」などという、御為こかしの「情報」を、まことしやかにしたり顔で説明する「予報士」がいたりする。だから他人の言動に依存したり振り回されたりしがちな社会になり、益々自力で判断するという地方が低下し、あるいは劣化してしまうのではなからうか。そこで豚と校長の会話を、長々と引用したのは、今日の社会状況を、まるで予期していたかのような生き写しに思われたからである。

例えば、渋滞の解消や安全の向上のためと称する、道路の建設や拡幅の工事、安定した水源の確保や水害から流域を防止し、水利の便を拡充させるために、などと掲げる多目的ダムの建設、その他、国民の安全や安心を優先し、合理的で効率的な「公共工事」を謳う「経済活動」と同類なものはなからうか。この「経済」という熟語は、「経世済民」の略語だと教えられた。辞書にも「①国を治め人民を救うこと。経世済民。政治。②(economy)人間の共同生活の基礎をなす物質的財貨の生産・分配・消費の行為・過程、並びにそれを通じて形成される人と人との社会関係の総体。↓理財。」<sup>(注7)</sup>という説明が施されているのだが、果たして「国を治め人民を救うこと」を目的として、その

通りに実施され、貢献しているかどうか疑わしい。なぜならば、「物質的財貨の生産・分配・消費の行為・過程」を経ながら、それぞれの損得、大小、高低、強弱、多少、出来不出来などに伴う差別や序列を浮き彫りにした「格差社会」をつくり出し、「それを通じて形成される人と人との社会関係」が、無機質なモノを介するだけで、つながりの希薄な「無縁社会」を形成するようになった。モノに対する欲望の肥大が加速し、歪みの多い「関係の総体」というべく自己矛盾に満ちた社会的状況に陥り、またしても脱皮を図り克服すべく改革や改善に関する計画、想定、予告、予想などに希望や期待を包んで謳う御為こかしの文言、無責任な言動を氾濫させる原因にもなっていると思うのだが、どうだろう。

経済とは、「経世済民」のことであると教えられながらも、むしろ語義通りの「経世」から遠ざかり、「済民」を叶えられないのはどうしたことであろう。経済という言葉、経済的な○○、△△が経済的だ、□□だから不経済だ、などと多用するものの、その真意や意味するところは、自分による、自分のための自治、自給(救)であり、利害打算や損得に拘泥する「自力救済」のための活動に固執するばかりで、弱い立場の「人民を救うこと」という政治的な配慮に欠け、むしろ乖離する社会状況なのではないかと憂慮するのだが、杞憂であろうか。

人間は自救権や自救行為と称する自力救済を、優先的に主張し、その活動も可能である。しかし、豚は「家畜撲殺同意調印法」に基づく、

「死亡承諾書」を拒否すべく自救権はもとより、自救行為も不可能である。人間と豚と一緒にするとは何事だ、所詮無理ではないか、などとお叱りを受けるであろうが、それでも校長が話した通り、

「実はね、この世界に生きてるものは、みんな死ななけあいかんのだ。実際もうどんなもんでも死ぬんだよ。人間の中の貴族でも、金持でも、又私のような、中産階級でも、それからごくつまらない乞食でもね。」

「はあ、」豚は声が咽喉につまって、はつきり返事ができなかった。「また人間でない動物でもね、たとえば馬でも、牛でも、鶏でも、なまずでも、(中略)だからお前も私もいつか、きっと死ぬのにきまつてる。」

という死生観は、『三宝絵』のなかの「鹿王」も、

此ノ王ノ奉ルニハ次デニ当レル鹿シニ涙タヲ垂レテ誘フヘテ云フ、

命有ル物ハ皆死ヌ。誰力是ヲ免レム。道々ニ仏ヲ念ゼヨ。恨ミ  
ノ心ヲ成シテ人ニ向フナ。  
ト教ヘテ遺ル。

と述べており、私には同じように見えるのだが、どうだろう。「ランドン農学校」の校長には、「道々ニ仏ヲ念ゼヨ。恨ミノ心ヲ成シテ人ニ向フナ」という慰藉も、諭すための配慮や言葉もない。豚でも、

先刻承知している「生者必滅」の「条理」を、威嚇や狡猾な様相を抑えながら、ひたすら「死亡承諾書」を得るための説教を、「一瀉千里にまくしかけた」とのことである。

校長はじめ、教師や生徒たちは、人間としての経済的な打算を展開し、豚は「物質的財貨」と呼ばれる販売商品であり、生死一体の有機物として扱われている。すでに「有機体では豚なのだ」という分別者らしい生徒の知見を紹介したが、「飼育」された豚、「肥育器」にかけられた豚は、「撲殺」されるのを待つ他はない。豚を含めた家畜には、病で死ぬことはあっても自救権はない。自力救済を願いながら自ら死ぬことも叶わない。だから、豚は寿命を待たずに死ぬ他はない。豚は自らの運命を承知しており、諦めざるを得なかった。「撲殺」されることを拒否しながらも、やがて死ぬ時を覚悟するのだった。

「おおい、いよいよ急がなきゃならないよ。先頃の死亡承諾書、あいつへ今日はどうしても、爪判を押して貰いたい。別に大した事じゃない。押して呉れ。」

「いやです、いやです。」豚は泣く。

「厭だ？ おい。あんまり勝手を云うんじゃない、その身体は全体みんな、学校のお陰で出来たんだ。これからだって毎日麦のふすま二合、阿麻仁二合と玉蜀黍の、粉五合ずつやるんだぞ、さあいい加減に判をつけ、さあつかないか。」

なるほど斯う怒り出して見ると、校長なんというのは、實際恐

いものなんだ。豚はすっかりおびえて了い、

「つきます。つきます。」と、かすれた声で云ったのだ。

「よろしい、では。」と校長は、やっとのことに機嫌を直し、手早くあの死亡承諾書の、黄いろな紙を取り出して、豚の眼の前にひろげたのだ。

「どこへつけばいいんですか。」豚は泣きながら尋ねた。

という。やがて『うはん。よろしい。これでいい。』校長は紙を引っぱって、よくその判を調べてから、機嫌を直してこう云った。「このことである。続いて「戸口で待っていたらしく、あの意地のわるい畜産の教師が、いきなりやって来た。」うえに、「教師は『さあ、いずれ模様を見まして、鶏やあひるですと、きつと間違ひなく肥りますが、斯う云う神経過敏な豚は、或は強制肥育では甘く行かないかも知れませんが。』」そうか。なるほど。とにかくしつかりやり給え。』そして校長は帰って行った。」とのことである。

豚は、人間の奸策に屈し、運命に殉ずることを決断したのである。それでも「死亡承諾書」の話聞き、かつ「黄いろな紙」だという「死亡承諾書」を見てからというものの、不安や苦惱、恐怖のあまり、「神経過敏な豚」は「神経性栄養不良」に陥り、肥育器にかけられ、さらには「強制肥育」を強いられ、「豚はいくら呑ままいとしても、どうしても咽喉で負けてしまい、その練ったものが胃の中に入って、だんだん腹が重くなる。これが強制肥育だった。豚の気持ちの悪いこと、

まるで夢中で一日泣いた。」とある。あゝ、学校は、いや人間はかくも小賢しく、傲慢無礼な者なのであろうか。

この物語は、家畜だという豚を飼育する「農学校」だから、当然のことだとして、少しばかり豚の運命に同情を寄せ、人間と豚の間わりと会話のもたらず諧謔、「家畜撲殺同意調印法」「死亡承諾書」「肥育器」「強制肥育」などの奇抜な発想や造語、物語の皮肉な展開などに興味関心を抱きながら読む人が多いことだろう。私は、それに加え「農学校」に限らない「学校」で、豚と同じ哺乳類だという人間である園児、児童、生徒、学生などと名づけられた人々を、「肥育器」より大きいと思われる「教室」で、「畜産学」とは限らない各種の専門科目を修めたという教員が、飼育とは言わないけれども勉強や学問と称して、あるいは躰や教育という名のもとで、国政を司る為政者や行政を担う官僚などが求める「期待される人間像」づくりに荷担し、指導に余念がないのではないかという画策ふりを思わずにいられないのだが、どうだろう。二言目には「一人ひとりを大切に」「個性を尊重し確立を目指す」「明るく楽しい学校に」などという目標を掲げながら、「いじめ」や「登校拒否」「学級崩壊」などが撲滅したのであろうか。

賢治は「フランドン農学校」のもと、豚を例に「家畜撲殺同意調印法」なる奇抜な法令を創出し、「死亡承諾書」をめぐる物語を展開したものの、豚は商品として飼育され、結局「撲殺」を強いられたのである。私たち人間は、同じ哺乳類でも豚と異なる、高等動物である、と自称し、高等教育機関の設置や機会を整え、多くのことを学び教授

されながら、「国を治め、人民を救う」ための経済活動ではなく、自  
救権の行使という自力救済に拘泥した行為に追われているだけなのは  
なからうか。だから残業を重ね「働き過ぎ」であつても「単身赴任」  
を強いられ、「過労死」や「うつ病」が増えても不忠議なことではない。  
行政は「国際化」を掲げ、「自由化」「規制緩和」を謳い、「働き方の  
多様化」、いや「多様な働き方があつてもいいのではないか」などと  
いう無責任な甘言を放ち、非正規雇用の増大に至る口実や要因をつ  
くり出している。それでいて不都合な事実は、「選択の自由」に甘ん  
じた結果であり「自己責任だ」として押しつけられる仕組み——だ  
から人間は、自らが「自力救済」の死闘によつて「撲殺」され兼ねな  
い無類の困難を回避したり、過酷な試練を克服したり、不断の努力を  
怠つてはいけないということであり、豚に限らず家畜の死と言えども  
他人事ではない、という「可惜」命の精神が必要なのである。

人間は「豚に真珠」という慣用句を承知していることであらう。豊  
かさを享受するために無機質なモノの生産と消費を繰り返し、自然の  
生態系を狂わせたり壊したりして、自己満足のために荷担して来たの  
である。もう「なめとこ山の熊」だけではなく、海や山に生息してい  
る「生物多様性」と称される多くの命の関わりや「絆(きづな)」を  
断ち、自然の「おもてなし」を忘れてはいけない。人間は、後天的に  
身につけた知識を試すかのようにモノづくりの勤しんで来た。そのた  
め儲けの神様の信者となり、モノに囲まれた豊かな生活を享受するよ  
うになった。しかし、人間の命は、モノ化に等しい無機質な状況に追

い込まれたり、個別化や孤立化を余儀なくされたり、諸々の命のつな  
がりに支えられているという意識が希薄になつて来たのではなからう  
か。喻えられる「縁起」を忘れ、目に見えない「赤い糸」が細く、衰  
退、脆弱になり、その存在や意味さえ分からなくなつて来たというこ  
とである。だからか、何もかも最新だという文明の利器を活用し、人  
工的に創出、量産、再生を試みざるを得なくなつたということであり、  
「子どもが授かった」と言わずに、「子どもをつくる」「子どもをも  
うけた」というのも無理からぬのである。かつては「なめとこ山」に限  
らない里山や裏山、鎮守の森などを疇(ねぐら)として田圃や畑、湿  
地帯などに生息し「子どもを授けた」という「ゴウノトリ(鶴)」に  
見放され、飛来しなくなったのが原因なのかも知れない。

人間は、真珠の美しさを希求するあまり「改良改善」を究め、人工  
的な作為によつて何もかも創り出せるという傲慢な強迫観念に駆ら  
れ、矛盾のなかを生き急いでいるのではなからうか。それこそが「豚  
に真珠」に等しい皮肉であり、愚の骨頂、豊かさの陥穽である。なる  
ほど辛い日々の向こうに幸せがあるのかも知れない。だから、ものの  
道理や真実は、学校の教員だけが教えられるものでも、かつまた教え  
てくれるだろうという期待も持たれなくなった。賢治は、豚の生死を  
通して「可惜」命の真実と必然を教えてくれたのである。賢治は、多  
くの作品だけではなく、掛け替えのない「死」を残し、豚もまた「死  
を残した。私たちは、たかさんの「死」を戴いて生きている、という  
「可惜」命の尊厳を自覚し、やはり「死」を残すために生きて学ぶ他

はない。

(ちば みつぎ・高崎経済大学地域政策学部教授)

〔注〕

(1) 国際化のなかの「自給率」については、「生産の概念と消費の概念を混同して自給率を論じたり、外国産を規制すれば国内産が増加するかのようなことを話したりするのは誤解である。」そこで「国産品と輸入品の代替関係」に基づいて分析し、導かれる「国産化率」の正統性について教えられた。また、農林水産省が公表している「食料自給率」は、その算出方法や定義が一種類ではないので「品目別食料自給率」「穀物食料自給率」「供給熱量総合食料自給率」「金額ベースの総合食料自給率」などがあり、状況によって使い分けているのが実状だ、ということである。それぞれ特徴があり、総合的に理解する必要がある、という。

以上、茂木創『食料自給率という幻——誰のための農業政策なのか』(唯学書房、二〇一二年九月三十日第一刷発行)を参照した。是非、一読をお願ひしたい。

(2) 拙著『百姓思想の研究——近代文学試論』(高文堂出版社、昭和五十五年一月十五日初版第一刷発行)にて、長塚節の唯一の長編小説『土』を中心に、画家のジャン・フランソワ・ミレーの手紙や絵画、そして、チェーホフの『百姓たち』などを通して、「百姓」の「精神」や「思想」について論究したことがある。

(3) 「つらい話」とは、小沢俊郎「つらい『豚』の話」という論考を参照した。小沢俊郎『宮澤賢治論集』(有精堂、一九八七年三月十四日初版第一刷発行)一四九～一六二頁。

(4) 「フランドン農学校の豚」の引用は、『新編 風の又三郎』(新潮文庫、平成八年六月十日刊)に拠った。一五五～一七四頁。

(5) 「阿麻仁」とは、「阿麻の種子。油を搾って食用とする。」と、「フランドン農学校の豚」のなかの注にて説明されていた。注4の文庫本、三二四頁。

(6) 栗原敦『宮澤賢治——透明な軌道の上から』(新宿書房、初版第一刷発行)のなかの一六二頁、『かなしい生物』の物語——『フランドン農学校の豚』考より引用した。

(7) 『新村出編 広辞苑 第四版』(岩波書店)七八六頁。

(8) 畠山重篤『森は海の恋人』(北斗出版、一九九四年十月二十五日初版第一刷発行、二〇〇三年一月二十五日初版十七刷発行)を参照した。生物多様性とは、「森と海との奏でる物語」と教えられた。何と素敵なる表現なのであろう。是非、一読をお願ひしたい。